
竜の世界にとりっぷ！

御紋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の世界にとつづく！

【Zマーク】

Z78790

【作者名】

御紋

【あらすじ】

もふもふがあるなうつむつるもあつてもいいじゃないかと思つてついやりました。

しかも、可愛さとかよりも逞しさ重視。

書いてる人が違うところも中身は異なるのですね。

夕花さまの動物王国シリーズをはじめとされる皆様に続いてみました。

異色ネタとして、お遊びにご覧ください。

(前書き)

一部に、「…とりつぶー」を書かれた方たちのキャラ名（猫世界・狼世界・豹世界・犬世界・羊世界・兔世界・鼠世界・馬世界）が書かれています。

ご容赦ください。

拝啓 我が愛すべきクソジジイビの

お元氣でいらっしゃいますでしょうか。我が祖父母のよ。

私は…元氣です。

私の両親が亡くなつてから、早くも22年の年月が流れました。
ひいていうのならば、私を引き取つて養育を行つてくださつた祖父
母との生活も22年だつたということですね。　お世話にな
りました。

とくにおじい様には私のためといつよりも、もはや貴方の趣味で
しょうといいたくなるよつた鍛錬をよくぞつけてくださいました。
おかげでこちどらの身体は女性のはずなのに、筋肉がすきについ
てて、胸筋背筋上腕筋のしなやかさ、腹直筋に至つては素敵に割れ
てしましました。なんですか、この6つに割れてしまつたお腹。
どうして祖父と結婚しちやつたのかが私の七不思議の一つである
優しいお祖母さまが「この子は女の子なのに…」と嘆きつつ、道着
のほつれを縫つてくださつたことは、私の大切な思い出の一つです。
でも、ご自分の連れ添いを止めてはくださらなかつたんですね、
お祖母さま。

そんな優しい祖母が先に逝かれて、もう三年。

落ち込む貴方が、開き直つたとたんに私への稽古をむりに強化し
た時は「このジジイだけはいつか…」と思いもしましたが。
それでも、唯一残つた家族ですもの。老後の介護はしつかりしてや
ろうと決心していた私です。

残念ながら、それはもう果たせないようですが。

これからは街の人々に愛されるクソジジイとして邁進しつつ、ボケ
た後には周りの方に迷惑をかけないように老後をお過ごしください

ませ。

第一から第八までいる貴方の彼女たちと、数多い弟子たちには
よろしくお伝えください。

ちなみに、養子にとるなら面貰いがお勧めですよ。師範代のあたりにいいのがいらっしゃつたはずですが、齧らない程度に打診しちゃつてください。奴なら落ちます、たぶん。

それでは、異世界にて「テックキブラシ」を抱えつつ、さようならです
マイグランパ！

佳永^{かな}

ああ。

「今日も空が青い…」

瞼に染みる美しい異世界の空に、なぜかため息が漏れました。

私がなぜ、このような異世界でこんなため息をついているのかといいますと、特に深い意味はないのです。ええ、事は単純、次第も单纯。

単純に、私の身体能力と運が悪かつた。それだけです。

本職が我が家の中伝い（という名の武道館師範代行）である私ですが、御町内のプール掃除というボランティアの最中のことになりました。

元気な子供たちが、塩素の匂いのする柔らかな髪の毛をなびかせながら帰るのを見届けた後、備品である「テックキブラシ」を片手にプール周りを掃除しておりました。

ええ、棒術もこなす我が道場です。「テックキブラシ」といえども駆使

するの得意です。

さつさかさと掃除をして、今日の食事当番の作った夕御飯を食べ
て帰ることもくらんでおりました。

「それ！！」

何故か

果然と弦八た私は間違つてない。間違つてない。

プールの備品であるデッキブラシには、我が町内会のサイン入り。

目の前には、大小の蛇の群れ

鯨の如きが、此處に現れるのは、恐らくは、此處に現れる。

らねえんだぜえええええええええええ

まとわりついでくる蛇たちに、デッキブラシ片手に応戦してしまつゝ理かせん——と聞龜つて一ぱー。

そんな自分の脳裏の裏では、プールの中を一生懸命に泳いでいた

一一一蛇をデッキブラシで掬いあげて草むらに放してやつたことが何

故か思い出されました

「ああ、殺気が痛いくらいで。聞いてる“落人”とは全然違うなあ

とか思つた

仕事仲間のトニルヒントヤが笑つて一言。

あの場にいた一人は嫌味のつもりはないようですが、聞いてるこ

ちらはいたたまれません。すいません。
「蛇の身体の方だと、人形のときよりも怪我しきづこはずなのこせ、

なんかすげえ痛かったしな

「俺なんか、一ヶ月痛み残つてたぜ」

あんなの初めてだつた。

ははははは、と笑う仕事仲間。

すいません、すいません、透明な力と呼ばれる秘技まで駆使して

ありました。本当にすいません。

「俺はアレで惚れたね」

「俺も」

「「アニキ！ と呼びたくなつたよ」」

すいません、すいません、私女です、本当にすいません。

ていうか、あんたら本気で嫌味じやないんだろうな、これ。

毎日聞かされる友人たちの会話に、いらっしゃったのは本当です。

叩きのめして、蛇たちを戦闘不能にした後のことでした。

「　これは面白い」

振り向いたところで、素晴らしい美形がいました。

ブルーブラックの髪の青年は、見たところ私と同じ年頃でしょうか。20代後半くらい。

黒々とした瞳のなかには好奇と興味。

「私がおまえを保護しよう」

ぐつと掴んできた掌には、執拗なまでの渾身の力が込められておりました。

現在のご主人様になつたその人は爬虫類の男。

竜族のリア

ディでした。

聞いた話では、この世界は人に転化できる動物たちの世界だとか。上位種である虎族や竜族の方々は、異世界から落ちてくる人間たちおひつどい“落人”を保護する義務までもを担つていらっしゃるとかどうとか。

この世界にも社会に奉仕するという貴族の美学はあったのですね。素敵です。

おかげで私も立派に生活しています。ありがとうございます、ご主人さま。

このごろは数日のわずかな間に私のいた世界からの“落人”が連続しているとか。

虎族のラヴィイ・シューさま宅のリンさんはじめ、狼族のバリデスさま宅のナミさん、豹族のカークさま宅のリナさん、羊族のノルディさん宅の芽衣さん、犬族のレビアンさん宅のななさん、兔族のリイさん宅のコーナさん、鼠族のジエラルさま宅の百合さん、馬族のディディエスさん宅の雪乃さん。

みなさん、元気すぎます。可愛すぎてハグしようとしたら、目線で停められてしまつたじゃないですか。どちらの御主人さまも、嫉妬深いことこのうえないです。

出張派遣仕事のあいまで各国々へお邪魔した時のこと思い出すと、ため息がもれます。

蛇は嫌いではありませんよ、私も。

そのひび割れたような鱗の硬質さ、触った時のなんともいえないサラサラ感、前後に一生懸命ちろちろとしている二つに割れた赤い舌も嫌いじゃありません。むしろ、好きです。

動物園で鎮座している蛇の姿みて、拝んだことは何度あつたか。だがしかし。

だれもこんな命がけの職につきたいと言つた覚えはありませんよ、ご主人様。

「今日の仕事は、大老のチエイサ様だ。報酬は十一分。仕事に

励めよ!」

いえっさ。

返事はこれしか許されていません、だつて仕事ですもの。私が手に持つたのは、一緒に異世界にやつてきた故郷の「テッキブラシ。

しっかりと握りしめます。

「 カナ、帰つたら俺のところにこいよー」

『主人様であるリアディさまは、いい笑顔で仰います。

「リアディさま。私はお仕事が終わつたらゆつくりとお風呂にはいつて、酒を飲んで寝たいんですが」

体力仕事をこなしたあとに、守銭奴の『主人様のお守りまでやる気はありません。

ちなみに、私は成人ですので飲酒はOKです。 法は破つてしません。

お屋敷に住み込みのお仕事ですので、御主人さまのお部屋にて無料マッサージをさせられるのか、金を数える手伝いをさせられるのが解りませんけど、そんなことまでやってられませんよ、こちどら。

「 いい酒、用意しておいてやるから」

「仕方ありませんね、帰つてお風呂をすませてから手伝いにいってあげましょう」

提示された条件に首を縊に振つたのは、『主人様の秘蔵の酒は各國から寄せられたものだけあって美味しいからです。

決して、私はアル中ではありません。

美味しいものが好きなだけです。

「 飲んだら寝るだけのつもりなんだよな、この発言つて」

『主人様がなにか微妙な顔をして話されましたが私は知りません。仕事の汗をかいたあとに風呂を浴びたいと思うのは、日本人の性です。自分の匂いをまき散らすのは趣味ではありませんから!!』

「じつじつじつじつじつ。

今日も「テッキブラシはイイ音を立てています。

専用の無香料の石鹼で磨いた鱗はとても美しいです。

「かゆいところはありますか？」 チェイサさま

「うむ、もうちょっと右を頼む」

「希望がありましたので、石鹼の泡で滑り易くなつた鱗の上を草鞋で移動しつつ、テッキブラシを駆使します。

「ここですか？」

「あああ、そこじゃそこじゃ」

悶える老人の声がなんとも言い難いです。

「じつじつじとブラシをかけつつ、悶える爺の声を聞く。何の仕事ですかこれは。

気持ちいいのはここかここかああ！（必死）

「おおおおおお、いいかんじじゃあああ」

親の敵のように力を込めると、すく喜ばれました。

「私はこれでも腕力には自信があつたのですが。最終形態といふたくなる竜の姿をしたお客様にとつては、ちょうどいマッサージの按配でしかなかつたようです。く、屈辱。

だが、私の心は折れていない！

「お疲れでいらっしゃいますのねえ、チエイサさま」

ほほほほ。顎まで垂れる汗をかきつつ、愛想を振りまきます。

仕事つて大変。

仕事仲間のトールとレイヤは、竜の尻尾の根元をブラッシング中。

危険な仕事なのに、どうして男性が一人組で、まちがいなく女性である私が一人で仕事をしているのでしょうか。おかしいと思いませんか、何かが。

遠い目で思つ。

「つむ、やはり年をとると疲れがでてのう。 リアティ殿が作つてくださったこのマッサージ付き湯屋が最近のワシの娯楽じゃよ」

「機嫌気分で、お客様が話されました。

「そうですか。喜んでいただけているようで何よりです」

マッサージ付き湯屋。（竜形限定）

リアティさま、何を考えてこんなことじみつとしたんですか。

既に本人に確認して答えを知っている問い合わせ、再び脳内に満ちた。

『金だ、金』

守銭奴のご主人様が答えた姿を思い出した。

『慈善事業はもちろん大事だが、それだけじゃ手がまわらん。たんまり錢を貯め込んだ老人相手に竜形での湯屋をすりゃあ金が入る。すなわち、ちびどもの飯になるんだぜ』

“小さき者”と呼ばれる屋敷で保護されている蛇たちを思い出す。まだ人形をとれない彼等は、上位種であるリアティさまの庇護のもとで養われています。

メイドさん達が忙しそうなときに手伝いに行きましたが、まあ可愛いこと。

田玉はまんまるで、お口もキュー。

かまってほしいのか、私の腕をむじむじと上へ下へしては落ちる子供たちの姿は癒しでした。

もふもふもいいが、つやつやさらさらも正義！－

私は平熱が高いので（基礎代謝が高いのでねー）、温かい毛よりも冷たい鱗のほうが好きなのです。

指に絡ませた子蛇たちは可愛いぜ！

ですので、そんな彼等を養うためなら、お姉さんはお仕事頑張るよ！－

何度もだつたか忘れた決意を、もう一度したところだった。

ざわりと見えないアンテナが反応した。

「トール！ レイヤー！！ 飛べ！！！」

叫びながら、自分も大きくデッキブラシを中心にして高く飛び上
がつた。

「ぶはははは！！」

マッサージがどこかの笑いのツボにでも入ったのか。
チエイサさまが竜形のままで笑い、その拍子にその大きな身体を
揺らして寝がえりを打つた。

「ずしん！！」

大きな音がして、洗い場にしていた砂利の敷いた砂場で砂埃が立
つた。

「トール！ レイヤー！ 生きてるか！！」

大きく跳躍していたおかげでその巨体の下敷きにならずにすんだ
佳永は、仕事仲間に声をかけた。

「うつす！ 生きてます、アニキ！」

「俺も無事です！ カナのアニキ！！」

掛け声は間に合つたらしい。

「尾に気をつけて、しばらく離れてろ！！」

「了解！！」

尻尾のあたりで仕事をしていった連中は、尻尾の第一次災害を受けるおそれもあるので、避難を命じる。

もちろん、自分も避難した。

「どうか、アニキ呼びはやめろ！！」

道場の弟子たちにも陰でそう呼ばれていたことを思い出して、佳
永はちよつといらつとした。

結局、チエイサさまはしばらくしたら笑いが収まったようだつた
ので、再度身体を磨き上げてさしあげ、仕上げに特製のワックスを
塗つてさようならをした。

今日の竜形専用サロン、お仕事終了です。
あー、疲れたつ。

「リアディさま、酒くください酒！！」

ばたんと扉を開けて、報酬をねだる。

「第一声がそれかよ」

呆れた声で、突っ込みが来た。

「あら？ リアディさま、お仕事お疲れ様でした。入つてもよろしいですかしら？ …とでも云えればいいのですか？」

うふふふ。

身体をくねらせながら、新人メイドあたりがやりそうな仕草を真似てみた。

鳥肌が立ちましたが。

「いらん、気持ち悪い」

すっぱりと拒否された。

私の真実を理解してくれているようで何よりです。

「チヨイサさまからの感想だ。とても気持ち良かつた。

大変だ

ろうが、また頼むとのお言葉だ！」

帳簿片手にご主人様が告げられました。

「いえっさ、お客さまのまたのおこしをお待ちしております！」

ということで、新しい固定客ゲットを祝い、酒を飲むのだ。

そして、トルとレイヤを巻き込んで作ってるお客様のカルテをご主人様に見せた。

「やっぱり、感覚が敏感な若者には、まだまだこれしたくないわ

なにしろ、まだ慣れてないからね、お互に。

顧客リストとでも言えばいいのか。

そこには今までのお客様の傾向が書いてある。

過敏肌の方は、突然身体を動かされるので、我々はとても危険。そうでなくとも、爪の間や四肢の付け根、意外に角の近くなどでもむずがゆくて動き出す方は多い。

まだまだ始めたばかりのこのお仕事なので、危険を少しでも減らすためには切磋琢磨が必要なのです。

こういう目と手と頭を使う作業は嫌いじゃないので、いいんだけども。

あとは、トールとレイヤにも感覚を養わせないとな。

訓練は始めてはいるが、なかなか身に付くものでもないしなあ。

聴勁。

ただ、二人とも蛇なだけあって感覚は掴みやすいはずだ。

頑張れ。

「 もともと、我々竜族は獣の姿でいるときは周りに生きものがいないときを選んできたからな。 竜形のときに触れられてどう感じるかなどわれわれ自身も知らないことが多い」

苦笑しつつ、御主人さまが言されました。

器用な方です。

新しいもの好きなご主人様が、どこだかの“落人”からサロンなるものを聞いたために始めた仕事であるというのに。

「最初は無理かと思つてたんだが、佳永が来てくれて助かったよ。

ありがとうございます」「

「 いえいえ。こちらこそ、雇つていただいてますもの、あります」とお互いに深謝した。

守銭奴のご主人様だが礼儀は踏まえていらっしゃる。 この

世界のすばらしさは、教育が行き届いている点だろう。

最初は、獣になつて、人が獣になる世界なんて、どんなファンタジーだと思ったが。

話が通じる者同士でなによりだ。

酒を飲みつつ、仕事の愚痴や今後の仕事の指向性など、あとはまだ独身のご主人様の嫁はよ探せよなどといった己を棚に上げた発言をした気がします。

私は酒には強いのですが、ご主人様には勝ったためしがない。これが噂のうわばみかと思ったのは、異世界人にだけ通じる世迷言でしょう。

がんじん鳴つてる頭を押さえながら私が目覚めたのが、サラサラの上質のリネンに上半身を曝した御主人さまの胸のうちであったことは、一生の不覚です。

(なんで、一緒に寝てるんですか！！
（ …おまえ、酒呑むと変わらぬな）

了

(後書き)

一連に対しての異色ネタだなあと思いつつ、衝動に負けました。
勝手ながら、世界観に混ぜさせていただきました。
少しでも、皆様の暇つぶしになりましたなら嬉しいです。

たくさんのお評価、ありがとうございました。

脱けていた文字と、落人さんたちの書き漏れに気づき、修正させていただきました。まことに、失礼いたしました。（礼）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7879o/>

竜の世界にとりっぷ！

2011年2月12日21時55分発行